

図画工作、美術

図画工作科は、表現及び鑑賞の活動を通して、造形的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の形や色等と豊かに関わる資質・能力を育成することを目標としている。また、美術科は、小学校での図画工作科における学習経験と、そこで培われた資質・能力等をもとに、表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、造形的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる資質・能力を育成することを目標としている。

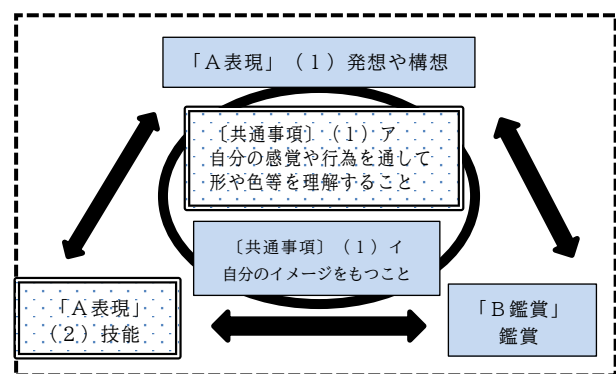
目標実現のために、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」を相互に関連させながら、資質・能力を育成する必要がある。

【小 学 校】

1 図画工作科の指導の重点

(1) 表現の活動と鑑賞の活動の指導を一体的に捉えよう

表現と鑑賞はそれぞれに独立して働くものではなく、互いに働きかけたり、働きかけられたりしながら一体的に補い合って高まっていく活動である。「A表現」や「B鑑賞」で発揮される資質・能力が往還するような児童の姿を思い浮かべて題材を考え、児童が試行錯誤しながら学習に向かうことができるように授業の見通しをもつ。



□ 知識及び技能 □ 思考力、判断力、表現力等 □ (全体) 学びに向かう力、人間性等

(2) 進んで形や色、材料に関わらせる表現の活動を充実させよう

「造形遊び」の実践では、全体を捉える広い視点と、部分を見る視点をもたせ、手や体全体の感覚や自分の気持ちを生かしながら、進んで身近にある自然物や人工の材料、場所、空間等に関わり、つくりだす喜びを味わわせるようにする。また、発想を広げたり、期待感を高めたりするために、活動の場や環境、ICTの効果的な活用を工夫する。

「絵や立体、工作に表す」の実践では、児童が表したいことに対して、自分のもてる力を試す、広げる、発展すること等ができる活動を十分に保障する。児童一人一人に寄り添い、表したいイメージを読み取ったり、感じ取ったりして、活動内容や表現技法、材料や用具、活動の場等について児童の思いに応じた適切な支援をする。

投影、保存、記録、撮影等でICTを効果的に活用することが期待されるが、直接ものを見たり触ったりして、自分の感覚や行為を通して感じる感覚も大切にする。

(3) よさや美しさ等を感じ取る鑑賞の活動を充実させよう

作品のよさや美しさ等を味わうためには、発達段階に応じて、児童の興味・関心を高めるものを、楽しく鑑賞できるようにする。児童が感じたことを話し合ったり、まとめたりする活動を位置付け、見方や感じ方を深められるようにする。

(4) 造形的な視点を育てよう【共通事項】

主な内容は、自分の感覚や行為を通して形や色等の造形的な特徴を捉えること、様々な対象や事象について自分なりのイメージをもつことである。「A表現」及び「B鑑賞」の指導においては、【共通事項】がどのような場面にも含まれている事項として捉え、【共通事項】だけを題材にしたり、個別に取り上げて教えたりするなど硬直的な指導にならないよう、指導内容や方法を工夫して指導計画を具体化する必要がある。

2 主体的・対話的で深い学びを引き出す図画工作科の学習指導

(1) 自ら表現したいことを見付け、豊かに発想し、構想をする学習過程を重視しよう

材料や用具との出会わせ方を工夫し、興味を膨らませ、意欲を引き出す。そして、造形的な視点をもとに、児童が表現したいことを思い描けるように、手や体全体の感覚を働かせ、材料や用具の特徴を確かめる場等を設定する。また、時間配分だけでなく、児童にどのような資質・能力を育成するのかを意識しながら活動の見通しをもち、児童と共有する。

(2) 意図的な友達との関わりの場と必然的なコミュニケーションの場を設定しよう

表現及び鑑賞の活動を通して、児童が友達の作品、美術作品や生活の中の造形等に対して、よさや美しさ等を感じ取ったり、話し合いを通して考えたりする場を設定することで、対話的な学びを促す。〔共通事項〕の視点をもたせ、造形活動のねらいを達成するための言語活動を工夫するとともに、造形活動の時間を十分に確保することを配慮する。

(3) 事象や対象の見方や感じ方・考え方を深める学びを促そう

自分の思い描いた作品の具現化に向けて試行錯誤する過程や、造形的なよさや美しさを意識した表現を工夫しながら創造的な活動を楽しむ過程等を重視し、児童が考えることと教員が教えることのバランスを考慮する。児童が思いをもち、表現したいことを試行錯誤しながら表現する過程で、いろいろな材料や方法、題材等を提案して新しい世界を見付けさせることも大切である。

【学習活動の例】

	表現の活動	〔共通事項〕	鑑賞の活動
導入	出会う 思いをもつ	材料や用具に興味をもち、経験や体験から実感的に理解する。 鑑賞作品を分析する。	(参考作品の鑑賞) ・ 教科書・過年度の作品・教員制作の作品等の提示の工夫
展開	発想・構想する	イメージをもつ。	(中間鑑賞) ・ 意図的なタイミング ・ 環境や場の工夫 ・ 作品、他者との対話の工夫
	思いを表す	自分の思いと作品のつながりを発達段階に応じて形や色や造形的な特徴等と整理、対応させる。	
終末	振り返る	言語活動を充実させ、それぞれのよさに気付かせる。	(完成作品の鑑賞) ・ 作品、他者との対話の工夫

学びの広がり・深まり

(4) 評価を次の学習活動につなげよう

出来上がった作品と学習過程の両面から評価することが大切である。造形的な「見方・考え方」を働かせる学習になっているか、創造的な学習の主体が児童になっているかどうかという視点で考え、評価を児童の学習改善及び指導者の指導改善につなげる。

(5) 児童が自らの学習状況を把握するために効果的にICTを活用しよう

活動の過程や作品の写真・動画を撮影・保存し、学習過程を可視化することによって、学習の振り返りや目標設定への反映等に活用する。「つくり、つくりかえ、つくる」という学習過程を重視しながら、試行錯誤する児童の姿を大切にする。

主体的・対話的で深い学びの視点からの授業の工夫・改善（小3 造形遊び）

身に付けさせたい力等

- ・ 友人と交流しながら活動を思い付き、つくりだすことができる喜びを感じ取る。
- ・ 材料に切り込みを入れたり、組み合わせたりして体全体を働かせ、工夫して表現する。

活動例 <クミクミックス～段ボールを組み合わせ～>

- ① 段ボールに切り込みを入れ、組み合わせる形をつくる方法を知る。
- ② つくりたい形を考えたり、思い付いた形を試したりしながら、手や体全体を十分に働かせて活動する。
- ③ 友人と互いの活動を見合い、並べたりつないだりすることで、更に発想を広げ活動する。
- ④ 表現したいことや表し方を話し合ったり、他者の工夫を感じ取ったりする活動を取り入れ、造形的な見方・感じ方を広げる。
- ⑤ 活動の様子を写真や動画等を使って記録に残し、児童の活動の振り返りや教員の評価に生かす。

【中 学 校】

1 美術科の指導の重点

(1) 感性を豊かに育てよう

感性とは、「様々な対象・事象からよさや美しさ等の価値や心情等を感じ取る力」であり、知性と一体化して人間性や創造性の根幹をなす重要なものであると捉えて実践を行う。

美術科は、目に見えるものや目に見えない想像や心、感情、イメージ等を、目に見え、触れられるものに表現し、実体化するための基礎的能力及び創造的能力を育てる教科である。この特質は、「美しいものや自然に感動する心」の育成に強く関わることから、心の働きである感性の育成を一層重視する必要がある。また、感じ取って自分を更新していくこと、新しい意味や価値を創造していくこと等も含めて感性の働きであると捉え、表現や鑑賞の活動を通して、視覚、触覚等を働かせて心で見える体験を積み重ねることが大切になる。その際に、表現の可能性を広げるために、投影、撮影、編集等でICTを効果的に活用し、学習効果が高まるような工夫をする。

(2) 創造的に表現する活動を充実させよう

生徒の表現したい欲求を大切にしながら、形や色、材料等をもとに、より美しく創造的に、心豊かに表すための資質や能力を育成する。

「発想や構想の能力」と「創造的な技能」を育成することを重視し、それぞれを題材の中で関連させながら、指導することが大切である。また、3年間を見通して、「A表現」(1)ア及びイ、「描く活動」と「つくる活動」のバランスを考慮し、計画的に指導することも大切である。

(1)ア 発想や構想に関する資質・能力

感じ取ったことや考えたこと等をもとに、絵や彫刻等に表現する活動を通して、発想や構想に関する指導をする。

- ・ 感じ取ったことや考えたこと等をもとに主題を生み出すこと
- ・ 表したい主題を形や色、材料等を構成してどのようにして表現するのか構想を練ること

(1)イ 発想や構想に関する資質・能力

伝える、使うなどの目的や機能を考え、デザインや工芸等に表現する活動を通して、発想や構想に関する指導をする。

- ・ 身近な環境を含め、様々なものを対象とし、造形的に美しく構成したり、装飾したりするための発想や構想
- ・ 伝えたいことを、美しく、分かりやすく効果的に表現するための発想や構想
- ・ 用途や機能等を考えた発想や構想



(2)創造的に表す技能

発想や構想したこと等をもとに表現する活動を通して、技能に関する指導をする。

- ・ 意図に応じて材料や用具を生かし、創意工夫して表現する技能
- ・ 材料や用具の特性等を踏まえ、制作の順序等を考えながら、見通しをもって表現する技能

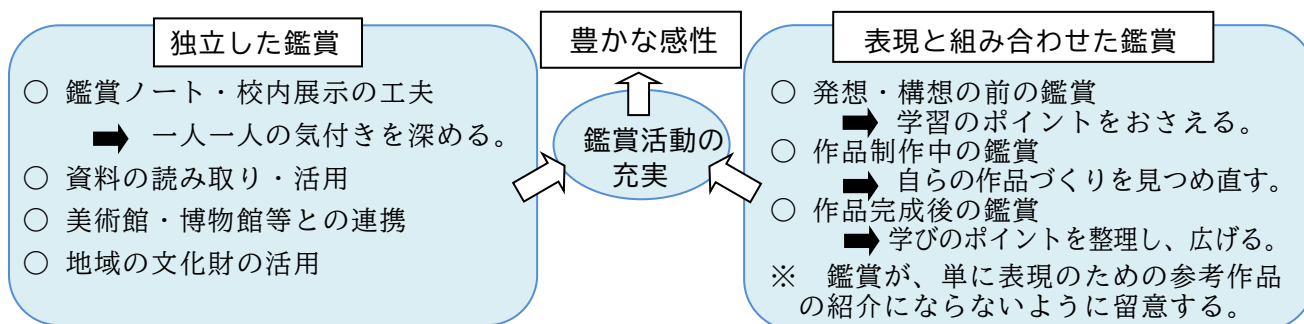
(3) 見方や感じ方を深める鑑賞の活動を充実させよう

鑑賞に充てる授業時数を適切に確保し、表現と鑑賞の相互の関連を図り、学習の効果が高まるようにする。

ア 作品に対する感じ方や思いを説明し合ったり、自分の価値意識をもって批評し合ったりして、美意識を高める。

イ 身近な地域や日本及び諸外国の美術の文化遺産等を鑑賞し、そのよさや美しさ等を味わい、美術文化の継承と創造への関心を高める。

ウ 生活を美しく豊かにする美術の働きについて理解する。



(4) 基礎的な能力を育てよう〔共通事項〕

〔共通事項〕は、「A表現」及び「B鑑賞」の指導を通して、形や色彩、材料、光等の性質やそれらが感情にもたらす効果、形や色彩の特徴等をもとに対象のイメージや作風を捉えること等を、実感を伴って理解させることが重要である。

2 主体的・対話的で深い学びを引き出す美術科の学習指導

(1) 生徒自らが主題を生み出し、主体的に活動できる工夫をしよう

造形的な視点をもとに、生徒自らが強く表現したいことを具体的に思い描くことができるように、題材との出合わせ方の工夫、材料・用具の確認、学習の見通しと自己の学習活動の振り返りの場等を設定することで、表現意欲を高め、主体的な学びを促す。また、美術の表現の可能性を広げるために、ICTや写真・動画等の映像メディアの積極的な活用を図る。

(2) 自分の考えを言語化するプロセスを効果的に取り入れた指導計画を作成しよう

鑑賞の学習では、作者や作品の時代背景、用いられている画材や技法等の指導にとどまらず、造形的な見方・考え方を働かせ、作品の本質について思考を深めることができる授業を展開する。授業のいずれかの段階において、作品を通して新たに学んだことと、既に知っていることとを結び付けながら主体的に思考することを促す発問を意図的に投げかける。また、このような鑑賞の学習が表現の学習に生かされるような場面を設定するなどして、表現と鑑賞を関連させる。

(3) 活用できる知識の蓄積を目指そう

配色や構成等による表現への効果等に関する知識、遠近法の原理等に関連した知識を扱う際は、ただ単に用語等を暗記させる指導法ではなく「実感的に理解できるようにすること」を大切にする。その他の学習場面でも活用できる知識とするために、生徒自身が試行錯誤したり意味を見付けたりしながら学んだ知識と、それまでの経験とを関連付けさせる。

(4) 一人一人のよさや可能性を伸ばし、自己実現を支援するための評価をしよう

主題の発想から作品の完成までの過程において、観点別に評価計画を作成し、計画的・継続的に評価する。一人一人の構想や表現のよさを多様な方法で評価し、励ますことによって主体的な表現への意欲を高め、生涯を通じた自己実現への態度を育てる。

(5) 学校における鑑賞のための環境づくりをしよう

生徒が造形的な視点を豊かにもつことができるよう、学校図書館等における観賞用図書、映像資料等の活用を図る。校内の適切な場所に鑑賞作品等を展示したり、学校や地域の実態に応じて、生徒の作品等の展示の機会を設けたりする。

主体的・対話的で深い学びの視点からの授業の工夫・改善（中2 デザインや工芸など）

身に付けさせたい力等

- ・ 形や色彩、材料等の効果を考え、見通しをもって表現する。

活動例 <季節を楽しむ心～和菓子づくりに挑戦～>

- ① 1人1台端末を活用して和菓子（写真）を鑑賞し、季節ごとに分類することで、自然や季節感を取り入れた日本の伝統美術のよさや特性について理解する。
- ② お試しの活動として、樹脂粘土に絵の具を練り込み、餡子を作成する。
- ③ ②の経験をもとに、形や色彩、材料等の効果を考え、オリジナル和菓子のデザインを考える。
- ④ 樹脂粘土と絵の具を使ってオリジナル和菓子を制作する。毎時間の終わりに、1人1台端末で制作過程の写真を撮り、気づき等を入力して振り返りをする。
- ⑤ 制作者が作品に込めた表現の意図や工夫を読み取る鑑賞会を実施する。
- ⑥ 校内に展示をし、生徒が作品を身近に感じられるよう環境を整える。